

【研究ノート】

ダンスの人類学の概観と展望

井上 淳生

1. はじめに

ダンスと呼ばれる現象をどのように説明したら良いのか、という課題は学問的に価値の低いものではない。なぜなら、人類史的にすべての社会にはダンスと呼ばれる営為が何らかの形で位置付いてきた経緯があり (Spencer 1985a)、ダンスは人類に普遍的に見られる現象のひとつだからである。しかし、そのようなダンスが、これまでの人類学において、研究対象として中心的な位置を占めてきたのだろうか。異文化を特徴付ける主要な要素のひとつとして、調査や記述の対象とはなりながらも、中心的なトピックになることはそれほど多くはなかったのではないだろうか (cf. Royce 1977 : 37, Kaeppler 1978 : 32)。このような問題意識のもとに打ち出された学問的潮流に「ダンスの人類学 dance anthropology, anthropology of dance」がある。「ダンスの人類学」とは、ダンスと呼びうる現象を、民族誌を彩る「アクセサリー」のひとつとしてではなく、社会現象としてのダンスとしてとらえることを目指した分野である。本稿では、人類学におけるダンス研究の潮流を概観することを通して、ダンスと呼ばれる現象を対象にした人類学の方向性を明確にする。

dance anthropologyは、日本では「舞踊人類学」と訳されている (遠藤 1999 : 326)。しかし、本稿では、人類学におけるダンス研究を指す時に、「ダンスの人類学」という呼称を採用する。その含意は、dance anthropologyを確立した英米の人類学の学的潮流に依拠するためであると同時に、「舞踊人類学」において「舞踊」概念の指示内容が必ずしも明確に定義されていないことに起因する概念上の混乱を避けるためである¹。「舞踊人類学」の主導者の一人である遠藤保子は、「舞踊」のことを「生産性を伴わない社会・文化に根ざしたリズムカルな動きによる人間の身体表現の総体」 (遠藤 2001 : 16) と定義しているが、ダンス概念との違いについては明確には示していない。「舞踊」と「ダンス」が概念としてさして変わりがなければ、「舞踊」を積極的に用いる根拠は薄くなる。むしろ、「舞踊」としてしまうことにより、「舞踏」や「スポーツ」という要素が排除されてしまう危険がある。そのため、本稿ではdance anthropologyを指す際に「舞踊人類学」ではなく、「ダンスの人類学」と呼ぶ。

2. 人類学におけるダンス研究の系譜

(1) 人間の行動におけるダンス

ダンスとは何か²。現在広く採用されている、最も一般的な定義は「一定の時間と空間内において行われる、リズムのあるパターン化された運動」 (Copeland and Cohen 1983 : 1) である。「リズム (律動)」と「パターン (様式)」という要素をもとに施されたこの定義は、学問分野を越えて広く採用される定義となっている。しかし、あまりにも範囲の広い内容のために、この定義には、たとえば、蜂の羽ばたきや惑星の運動など、人間の運動を人間以外のそれと区別できなくなるという問題がある。さらには、人間の運動に限定して再定義したとしても、木を切る行為や行進など、「リズム (律動)」と「パターン (様式)」を備えた人間の行為全般から、ダンスという行為のみを取り出すことができないといった問題も出てきてしまう。

このように「ダンス」と呼びうる現象をいかに定義したら良いのか、という問題に対して、人類学者はどのように応答してきたのだろうか³。その回答のひとつが、アンヤ・ロイスによる「功利性とは別次元にあるいくつかの目的のもとになされるリズムのある動き」(Royce 1977 : 5) という定義であり、ジュディス・ハンナによる「目的を持ち、リズムの面、文化の面において意図的にパターン化された一連の非言語的な身体動作を含む人間の行為」(Hanna 1996: 146) という定義であった。両者に共通することは、人間の行為全般の中からダンスを区別するために、「リズム」と「パターン (様式)」という要素の他に、「目的」を導入した点である。何らかの目的のもとに行われる「リズム」と「パターン (様式)」のある人間の運動のことをダンスと呼ぶことによって、人間の行為から「ダンス」を取り出すことを試みたのである。このように定義されるに至ったダンスという営みは、歴史的にも地域的にも世界にあまねく存在し、対象社会の特徴を色濃く反映するものとして古くから人類学の対象となってきた。たとえば、社会人類学者のポール・スペンサーによれば、それまでの人類学においてダンスは次のようにとらえられてきたという (Spencer 1985a)。それらは、社会内部の対立を緩和する「安全弁」としてのダンス (カタルシス理論)、社会を構成する要素としてのダンス (感情をコントロールするための教育の場として、相互行為の場として)、自己意識 (セルフ) が発生し、増長される場としてのダンス、境界を顕示するものとしてのダンス、儀礼ドラマとしてのダンス、深層構造に迫る入口としてのダンスである。

(2) ダンスの人類学の萌芽

では、「ダンスの人類学 dance anthropology」という分野は人類学においていつ頃から登場したのだろうか。その画期となった研究は、自身が踊り手であり、民族音楽学者でもあったガートルード・クラースによる論文「ダンスの民族学のパノラマ」(1960年)⁴であると言われている (cf. Kealiinohomoku 2001 : 91)。クラースがこの論文を発表した当時、人類学においてダンスを扱った研究は構造機能主義的アプローチから描かれたものが主流であった (Quigley 1997 : 106)。つまり、対象社会の調和および秩序を維持する際にダンスが果たしうる機能、という点に注目が集まっていた。たとえば、ラドクリフ＝ブラウンは、インド東部のアンダマン島民が集団で踊るダンスは、共同体内部の結束を高めるために機能し、個人に対して社会の秩序を維持するように仕向ける役割を果たすものとして描いている (Radcliffe＝Brown 1922)。このような構造機能主義的アプローチの特徴は、社会自体の安定性、調和性、超歴史性が前提とされた静態的な社会観を前提とするものだったが、対象社会におけるダンスの機能や役割に注目するという点は、静態的な社会観の限界を越える形で、その後の人類学者がダンスという対象を扱う際にも引き継がれている。たとえば、社会を固定的なものとしてではなく構造と反構造をともなう弁証法的過程であるとしたヴィクター・ターナーは、「コムニタスが実現される場としてのダンス」(Turner 1969 : 97) という示唆をその後に残している。ターナーの考えをダンス研究に援用したジュディス・ハンナは、社会内外の要因を含めた動的な視点からダンスをとらえている。ハンナは、構造の次元では男性優位であったウバカラの社会が、ダンスによって導かれる反構造の次元では女性優位になり、それにより男性と女性間の対立を調整する役割を担っていると主張する (Hanna 1977, 1979)。このように、社会内部におけるダンスの機能に注目した研究が蓄積されるなか、フランツ・ボアズの娘であるフランツィスカ・ボアズは、『人間社会におけるダンスの機能』(1944年)と題した論集を発表している。彼女は1933年、ニューヨークに「Boas School of Dance」(1949年に閉校)を開校し、ダンスを通じることで、人種

を越えた社会的なつながりの実現を目指した (Music Division of the Library of Congress 2010)。この論集は、1940年代に行われた当校でのセミナーを記録したものである (Quigley 1997: 106)。フランツィスカ・ボアズは自身が有名な踊り手であると同時に民族学者でもあり、クラスとも親交が深く、「ダンスの人類学」を語るうえで欠かすことのできない人物である。クラスは「ダンスの民族学のパノラマ」の中で、「人間の生を反映するものとしてのダンス」(Kurath 1960: 233) という視点のもと、ダンスを民族学的に研究する目的、方法、視角、対象地域などに関する通文化的な考察を行っている。なかでも、その後のダンスの人類学を方向付けるうえで重要な点は、西洋中心主義的なダンス観の相対化を提起した点である。クラスはフランツィスカ・ボアズとの往復書簡の中で次のように述べている。

「エスニックダンス [未開社会のダンス] / アートダンス [西洋のダンス]」という二分法を解消するために必要なことは、「ダンスの民族学」を個別のダンスを記録し、または再生産することと見なすことではない。そうではなく、人間の生活においてダンスと呼ばれるものがどのような位置を占めるのか、およびその探求の方法はいかなるものかを模索すること、すなわち「ダンスの民族学」を人類学の一分野ととらえることなのである。(Kurath 1960: 250、[] 内は引用者による)。

クラスの論文はタイトルこそ「ダンスの民族学」ではあるが、人類学の一分野としてダンスを研究することの意義がここでは指摘されている。つまり、クラスにとっての「ダンスの民族学」とは、非西洋の民族に見られるダンスを収集し、記録することが目的とされており、収集・記録の行為そのものが「西洋/非西洋」の差異を際立たせることによって、結果として両者の間の序列を強化してしまう弊害を備えたものであった。それに対し、彼女にとっての人類学とは、西洋のダンスと非西洋におけるダンスと呼びうる現象の間に序列を設けない相対主義的な視点に立った研究分野だったのである。

クラスのこの言葉の背景には、それまでのダンス研究が「未開」社会に見られるダンスに相当するものを原初の形態と見なし、文明化とともに西洋のダンスの形態に近付いていくという進化論的なダンス観を暗黙裏に採用していたという事実があった (ザックス 1972=1937)。つまり、西洋のまなざしによる「ダンス/ダンスではないもの」という区分を非西洋の「ダンスと呼びうるもの」にあてはめ、西洋の優位を前提に、その差異をことさらに極大化することへの危惧が、クラスをはじめ、当時の「ダンスの人類学」のパイオニア達に共有されていたのである。ミシガン大学でクラスのもとで学んだジョアン・ケアリノーモクは、それまで西洋のものとして自明視されてきたバレエを「エスニックなもの」と見なすことこそが、人類学者の務めであると述べている (Kealiinohomoku 1983: 533)。すなわち、西洋のダンスとされてきたバレエすらも、相対主義的な視点からすればひとつのエスニックなダンスに過ぎない、と考える視点こそ、西洋の人類学者に求められている点であると指摘しているのである (同上: 548)。このような態度は、現在の人類学においてはあまりにも常識的であり、ダンスに限らなければ言えないことでもない。しかし、クラスの教えを経たケアリノーモクの言葉が現在も色あせないのは、文化に関して展開されてきた議論とダンスに関する議論がほぼ重なりあうからである。このように、ダンスは対象社会の文化を色濃く反映するものではあるが、ダンスという枠組み自体が西洋由来であるために、ダンス概念の相対化を念頭に置くことを打ち出した点が初期の「ダンスの人類学」の特徴である。

(3) 文化としてのダンス

クラス以降（60年代以降）、対象社会におけるダンスという現象の重要性が人類学者の間でも認識され始める。とりわけ特徴的なことは、人類学者が「文化としてのダンス」を明確に意識し始めたことである。この理解はその後の文化概念批判を経た現在まで、ダンスを対象にする人類学者に基本的に引き継がれている視座である（Novack 1990 : 13）。たとえば、ダンスの人類学に関する教科書的な著作『ダンスの人類学』を残したアンヤ・ロイスは、ダンスの人類学の意義は、ダンスを文化的現象の最たるものにとらえる点にあると述べている（Royce 1977 : 14, 219）。そして、個別のダンスの形態を比較することに終始するのではなく、社会現象としてのダンスをより広い観点から研究することがダンスの人類学の目的であると主張している（同上 : 37）。同様に、民族音楽学者のアラン・ミリアムは、「ダンスとは文化そのものである。ダンスという存在は、人類学者がいうところの文化の概念と切り離して考えることはできない。」（Merriam 1974 : 17）として、「文化としてのダンス」という観点を明確に打ち出している。このように、ダンスに対して、他の文化的事象よりも高い評価を与えている点が現在にも引き継がれるダンスの人類学の特徴であった。

80年代後半には人類学内部に起きた文化概念批判と呼応して、「文化としてのダンス」に対する研究姿勢も状況的／過程的なものにシフトする。ダンスという概念も、その過程で再検討が進められることとなる。たとえば、アドリエンヌ・ケプラーは、ダンスとは「[私たちの生活の] ‘外部にある何か’ でも、また ‘確認可能な諸事実’ によって ‘組み立てられた’ 動きでもなく、社会的に構築された知のシステムである。」（Kaeppler 1999 : 22, [] 内引用者）と定義付け、「ダンス」という概念をより包括的な視点から「人間の動き human movement」という概念に置き換えることを示唆している。

「ダンスの人類学」の画期となった Kurath (1960) では、ダンスを人類学的に研究することの意義が示唆されていた。言い換えると、ダンスを人類学的に研究するということは、ダンスという概念そのものを相対化することであり、西洋的な意味でのダンスそれ自体を考察の対象に含めるということであった。その成果の一つが、「人間の動き human movement」という概念への換骨奪胎であったのである。「動き」に注目した研究は、後に「moving agent」(Farnell 1994) などの概念を生み、安定的・固定的な身体観を退ける方向に進む。ここで問題となるのは、ダンスという概念の有効性である。つまり、ダンスという概念自体を相対化した結果、「人間の動き」という概念が生まれたというのであれば、もはやダンスという概念は不要になったと考えたら良いのだろうか。筆者はそうは考えない。つまり、ダンスという概念の有効性は未だ失われていないと考える。なぜなら、現実にはダンスという名の下に行われる営みが数多く生産／再生産されており、それらに関わる当事者自身もダンスという概念を使用しているからである。つまり、ダンスと呼びうる現象を理解するためには、ダンスという概念が再帰的に使用される状況こそ、考察の対象とすべきであると筆者は考えるからである。さらには、「human movement」や「moving agent」といった一般性の高い概念を使用することによって、対象社会の人々が「ダンス」という用語によって何を説明しようとしているのかといった点を捨象してしまうことにつながりかねないからである。

この視点は、太田好信が文化概念に対して行った議論（文化概念の往還）を基礎としている。すなわち、文化概念を根底からとらえ直した結果、その政治性や構築性が暴かれたからといって、人類学は概念としての文化を捨て去って良いということにはならない、という議論である（太田 2010）。なぜなら、概念としての文化は既に人類学者の専有物ではなくなり、現実に広

く使われるようになっており、このような状況こそ分析すべきであるからである。そして、そのような作業を行うことができるのは人類学にはかならないからである。

次に、「ダンスの人類学」に関する制度的側面に注目すると、70年代後半から80年代初頭にかけて、その後の人類学的ダンス研究をリードする二つの組織がアメリカで設立されている。それが、Congress On Research in Dance (CORD) と Cross-Cultural Dance Resources (CCDR) である。CORDはCommittee On Research in Dance (1969年)を前身とし、1977年に設立された世界的なダンス研究の拠点である。その目的は、「ダンスおよびダンスに関連する分野のすべての側面に関する研究を推奨すること、出版や国際会議の開催、地方でのワークショップの開催を通して、アイデア・データ・方法論に関する交流を促進すること、研究素材へのアクセスを容易にする環境を整備すること」⁵であり、「ダンスの人類学」を代表する人類学者も多数在籍する。一方、CCDRは1981年にアリゾナ州立大学に設置された研究機関であり、その目的は、「ダンスのパフォーマンスおよび研究を推進すること、ダンスに関する資料を保存・調査すること、ダンスに関するイベントを開催する基盤を整えること、議論と協議を歓迎すること」⁶である。両組織ともに、「ダンスの人類学」を志す研究者にとって参照すべき資料を収集し、発信している。このように、アメリカを中心に人類学的ダンス研究の研究環境の整備が進む一方、日本の動向はどのようなものであったのだろうか。

(4) 日本におけるダンスの人類学

70年代以降の欧米におけるダンスの人類学の興隆に呼応して、日本でも「舞踊人類学」を確立しようという気運が高まった。1970年代の後半からは、舞踊研究家の上林澄雄、精神科医の石福恒雄らを中心にして欧米の研究動向が日本に紹介されるようになり(上林1979、石福1982)、その後は宮尾慈良や遠藤保子らを旗手として「舞踊人類学」の研究が進められてきた(cf. 宮尾1987, 2003, 2007・遠藤1999, 2001)。1976年には「舞踊学会」が設立され、舞踊に関する研究環境の整備が志向された。舞踊学会は、人類学だけでなく体育学、芸術学、哲学、歴史学などの分野からの研究者も参加しており、現在の日本におけるダンス研究のひとつの拠点となっている。ただ、舞踊学会における「舞踊人類学」の位置付けは必ずしも大きいものとは言えず、現在の日本の人類学において「舞踊人類学」という分野自体が確立しているとはいいがたい状況である⁷。この理由には、「ダンスの人類学」という分野が人類学において後発の分野であるという事情がある。そのため、理論、方法論の両面で、ある一定の到達を期待するのは性急だと言うこともできる(宮尾2003: 2)。

しかし、その事情を踏まえたうえで、現在の「舞踊人類学」の問題点を挙げるのであれば、次の2点が指摘できる。1点目は、概念としての「舞踊」と「文化」の関係が不明瞭なため、依然として「一民族・一文化・一ダンス」という枠組みのもとに各地のダンスを収集する試みが続けられている点である(cf. 遠藤2001、宮尾2007)。たとえば、宮尾(2007)では、エドワード・ホールの「隠れた次元」を下地にしながら、アジア各国に見られる土着のダンスが対象社会の「精神文化」を表している、という立場をとっている。つまり、ハワイのフラダンス、アメリカインディアンのサンダンス、アイヌの熊踊、というような「地域・民族」と「特定のダンス」の組合せを前提に、特定の地域・民族に属する特定の踊りがその地域・民族の「精神文化」を反映しているという視点に立っている。このような立場では、地域・民族に係留された文化としてのダンスという枠組みの制約を受け、現在の社会で進行する外部との交流による、加工や再生産といった動的な側面を記述することができないのである。

2点目は、「舞踊人類学」と、その他の人類学的ダンス研究およびダンスを対象とした人類学的研究との違いが明確に打ち出されていないという点である。さらには、隣接分野とされる民族舞踊学（ダンスエスノロジー dance ethnology／ダンスコレオロジー dance choreology）、ダンスを対象としたカルチュラルスタディーズ、パフォーマンス研究、人間の動き全般を対象とした人類学（Sklar 2001）との違いが明確ではないのである。これは「舞踊人類学」という分野の存在意義に関わる重大な問題であるのだが、現在のところ、明確な規定が行われているとは言いがたい。総じて「舞踊人類学」は、人類学という名を冠しているものの、昨今の人類学の議論との関係は希薄であり、分野としての存在意義を打ち出す途上にあるものと考えられる。

一方で、当然ながら、「舞踊人類学」というカテゴリーとは別に、日本においてダンスを対象とした人類学的研究も数多く存在する。なかでも本稿との関連で注目すべき研究は、仮面舞踊を素材に自己の変容や自己と他者の境界の揺らぎを考察した吉田（2011）と、音楽との関係から「トランスダンス」出現の過程を描いた野澤（2010）である。

（5） 「日常／非日常」 枠組みの相対化、「ダンスとその周辺」という視点

吉田（2011）は、パフォーマンス研究が提起した「主／客」二元論への異議を共有しつつ、演者（人間）と仮面（モノ）との主客関係の変化の過程および、モノとしての仮面が仮面自体の働きにいかんにか作用するのかを考察している（吉田 2011：13）。吉田の議論が示唆するところは、事例とした仮面舞踊劇が「閉じられていない」点にあり、人間とモノを含む関係主体が、その都度フレキシブルに関係をつくり出している点にある。すなわち、仮面舞踊劇をめぐる人とモノとの関係は、劇が行われる場（ダンスが踊られる場）において完結するものではなく、上演後も存続し続けるものである、という点にある（同上：28）。つまり、劇が行われる場（ダンスが踊られる場）において発生する種々の関係性や自己の変容は、その場面のみを観察するだけでは不十分なのである。

パフォーマンス研究は、「主／客」（演者／観客）という枠組みによって固定化された、「閉ざされたテキスト」としての戯曲分析からの脱却を出発点にしている（シェクナー1998）。劇そのもの、ダンスそのものをプロセスとして分析することによって、「演者／観客」という固定化された区分ではとらえきれない現実を理解することを、パフォーマンス研究は目指したのである。では、吉田の依拠したパフォーマンス研究から、「ダンスの人類学」に対していかなる示唆を得ることができるだろうか。筆者は、ダンスの「閉じられていない」側面に注目したい。つまり、ダンスと呼びうる現象は、実際に踊られる場においてのみ実現するのではなく、踊られていない場面とも何らかの形で連続しているという点である。

ダンスを扱ったこれまでの研究では、ダンスは「非日常」としてとらえられる傾向にあった。すなわち、構造化された「日常」における諸関係がダンスを通じて反転させられることで「非日常」的な関係が実現されるというものである。そして、多くの場合が、ダンスという「非日常」を経験することで、参加者はそれまでの「日常」とは少し違う新たな「日常」に帰還する、という説明がなされてきたように見受けられる⁸。しかし、ダンスに関して、「日常」と「非日常」とはそれほど明確に線を引けるものではないだろう。たとえば、ダンスと呼ばれる現象をどの程度まで「非日常」ととらえるかは、社会的歴史的コンテクストによって大きく異なりうるし、また、仮にダンスを「非日常」に属すると考えるならば、「非日常」を「日常」にした人々、つまり、ダンスを職業にした人々にとって何が「日常／非日常」になるのかが議論を要する課題になる。このように、ダンスに見られる「日常／非日常」の境界の揺れを考察の対象とする

ことが、ダンスという現象を理解するうえで重要になる⁹。

この点は、野澤豊一の研究から得られる知見にも関係する。野澤は近年、自身の研究において、アメリカの黒人ペンテコステ派教会における「シャウト」と呼ばれるトランスダンスを事例に、音楽およびダンスというものがいかにして生成するのか、という課題に迫っている（野澤 2010）。野澤の問題意識は、「シャウト」と呼ばれるトランスダンスは、音楽に媒介される様々な人間行動（歌、ダンス、特定の形式の発話や行為）が複合的に関係しあった現象であり、従来のアプローチでは、このような複合的な現象を十分には描けないというものである。野澤の言う従来のアプローチの問題点とは、「音楽」というカテゴリーを自明のものとし、「サウンド」のみを重視し過ぎた点である（野澤 2012）。さらには、そのために、音楽の「周辺」にある行動が捨棄され、複合的であるはずの眼前の現象を「音楽」のみで切り取った「冷たいもの」として記述してしまうという点である。

この視点は、ダンスを対象にした際にも有益となる。すなわち、ダンスを社会現象として扱うのであれば、ダンスが踊られる現場に限定した問いを發するのではなく（たとえば、その動きはどのようにして行われているのか、その動きは何を表しているのか、なぜこの人はこのダンスを踊るのか、という問い）、ダンスの周辺に見られる人間行動にも注目する必要があるということである。つまり、ダンスが踊られるその瞬間の動きだけでなく、踊られていない部分（たとえば、場を構成する物理的セッティングや人々の服装、言葉使い、社会的経済的背景、他の人が踊っている時の行動など）にも注目する必要がある。さらに言い換えるならば、ダンスは「動き」に還元されえないものであり、「ダンスとその周辺の行動」の両方を射程に入れる必要があるのである。

同様の点は 1990 年に既に、ダンスの人類学者のシンシア・ノヴァックが指摘していたことでもある。ノヴァックは、ダンスを文化として理解するためには、一般的なコミュニケーション論が發する「その動きは何を表しているのか？」という問いや、メアリー・ダグラスに代表される「身体には社会秩序がどのように反映されているのか？」という問いでは不十分だと指摘する（Novack 1990: 7）。その理由は、そのような問いかけでは、ダンスを通じた人々の経験を、人々自身の理解の仕方や人生と無関係に記述することにつながるからである。すなわち、社会的コンテクストから「動き」そのものを取り出してしまうことは、文化としてのダンスの理解につながらないからである。以上から、文化としてのダンスを理解するうえで、「日常／非日常」という枠組みの相対化および、ダンスの「周辺」の行動への注目は重要な視点であると筆者は考える。

ここまで、英米日における「ダンスの人類学」の動向、そこから引き出される視角について検討してきたが、以上をふまえて、以下では、今後の「ダンスの人類学」における課題と方向性について検討し、筆者なりの「ダンスの人類学」を提示したい。

（6）ダンスの人類学の展望

現在、我々は、目の前に展開される現象としてのダンスを、特定の主体、特定の地域に還元して理解することが不可能な時代に生きている。たとえば、フラダンスやフラメンコ、アルゼンチンタンゴなどは、起源とされる集団、地域に昔から変わらない姿で存在しているのではなく、それらの集団、地域を越えて加工され、再生産されている。ダンスもその影響のもと、文化としてのダンスが生成される過程、言わば、プロセスとしてのダンスに研究の焦点が集まるようになってきている（cf. 生地 1998、Karatsu 2003、古賀 2012）。これらの研究では、外来文化と

してのダンスが、地域の文脈との関係によりいかに作り替えられ、そして新たにつくり出されたダンスが地域の担い手にどのような影響を与えているのかが考察されている。

たとえば、生地陽は、日本におけるフラの「消費」を考察している。生地によると、外来のダンスとして、フラは戦後の日本に起きたハワイアン音楽の流行を追い風に踊られてきたが、1980年代に入ると地域のカルチャー教室などでも見られるようになり、特に中高年の女性を中心に人気を集めるようになった。この時期からフラは、健康に良いダンスとして中高年女性の間で広がるようになる。1990年代に入ると担い手には若い女性も見られるようになる（生地 1998：54、67）。生地は日本におけるフラの受容を「異文化の消費」ととらえ（同上：64）、日本でフラを踊ることと観光（ハワイへの旅行）との連続性、さらにはディーン・マッカネルの言葉を引きながら、フラを踊ることが「失われたオーセンティシティ」を他者の中に見出していることにつながっていると指摘する。

現在の「ダンスの人類学」の趨勢は、「文化としてのダンス」を研究する側面と「ダンスエスノグラフィー」と呼ばれる側面が混ざりあった状況にある（O'shea 2010：6）。前者は、再設定された文化概念をもとにしつつ「文化としてのダンス」に継続して注目し、その意味や再生産の過程に注目する方向であり（cf. Savigliano 1995）、後者は、ダンスを通じた自身の身体感覚の変容をも主なデータとし、社会的歴史的コンテクストとの関係から社会現象としてのダンスを考察する方向である（cf. McMains 2004, Marion 2008）。

このような状況において、現在のダンスの人類学は多様なテーマと結びついている。とりあげられるテーマは、ポストコロニアリズム、ナショナリズムとエスニシティ、コミュニケーション、グローバリゼーション、ジェンダー、身体など多岐にわたる（Reed 1998）。たとえば、ポストコロニアリズムの文脈におけるダンス研究では、ダンスは支配者にとっては秩序を乱す危険なものとしてとらえられていたと記されている（cf. Kaspin 1993）。植民地政府にとって、土着のダンスは植民地の人々が連帯する手段であり、統治体制をくつがえす可能性をたたえた危険なものであった。したがってそれらは統治者による規制や禁止の対象となっていた。同様のことは明治期の日本においても確認できる。明治初期の西洋化の裏側で、それまでの日本に存在した盆踊りが「賤しき風俗」として全国的に禁止されるのである。植民地主義の文脈とは事情が異なるが、既存のダンスを危険なものと思なす傾向は同様である。しかし、日本の文脈においてさらに重要なのは、盆踊り禁止の裏側で「進んだもの」として持ち込まれた西洋のダンスさえ、後に「不道德」という理由から取締の対象になるのである。つまり、統治者が土着のダンスを危険視する傾向は歴史的にも世界的に見られることであったのだが、「進んだもの」として外から持ち込まれたダンスさえ、時代を経るにつれて取締の対象とされるという点である（永井 2002）。この点は、ダンスという対象が統治者や社会的規範をいかに刺激するかを物語るものである。

以上をふまえたうえで、筆者は「ダンスの人類学」を次のようなものとして考えたい。文化としてのダンスを人類学的に研究する分野、すなわち、過程／周辺／境界の相対化という視点からダンスと呼ばれる現象を研究する分野である。言い換えるならば、ダンスはいかなるプロセスで生成するか（過程的な視点）、ダンスの周辺ではどのようなことが起きているか（周辺の視点）、ダンスをめぐるいかなる境界がありうるか（境界の相対化の視点）、という側面を射程に入れることができる分野を、筆者はダンスの人類学と呼びたいと考えている。

[注]

1. 日本語における「舞踊」とは、明治後期から大正時代にかけて定着した、坪内逍遙による造語である。この語をめぐっては、つくられた当時から、「舞踊」＝東洋の踊り／「舞踏」＝西洋の踊り、という区分や、「舞踊」＝広義の踊り／「舞踏」＝狭義の踊り、という互いに別種の概念規定が混在しており（郡司 1991: 18）、論者による指示内容の違いを明確にするためにも論の冒頭で概念規定をしておく必要がある。
2. 概念としてのダンスを検討するのであれば、「アート」「音楽」「パフォーマンス」などの隣接概念との関係を検討する必要がある。しかし、本稿では、「ダンスの人類学」におけるダンス概念の扱われ方に注目しているため、代表的論者の定義を挙げるに留める。
3. 人類学以外では、模倣 imitation、(感情) 表現 expression、形態 form という 3 つの観点およびそれらの複合からダンスを定義しようとする試みがある (Copeland and Cohen 1983)。
4. 原題は 'Panorama of Dance Ethnology'。dance ethnology は「民族舞踊学」と翻訳されることが通例である。しかし、「民族舞踊学」における「舞踊」は歴史的に非西洋の土着の踊りを指し、西洋の踊りを含めない傾向にあった。本稿では、西洋の踊りも含めたより広い概念として「ダンス」を採用している。
5. <http://www.cordance.org/history> 参照。
6. <http://www.ccdr.org/about.html> 参照。
7. 遠藤保子は「…近年、舞踊人類学をタイトルにした論文も多くなり、徐々に市民権を獲得しはじめている。」と述べている (遠藤 1999: 331)。しかし、現在、舞踊人類学をタイトルにした論文を目にすることは少なく、この発言から 10 年以上経った現在でも「舞踊人類学」が「市民権」を得ているとは言いがたい状況にある。
8. たとえば Spencer (1985b)。ここでは、ダンスが若者に対する長老社会からの圧力を一時的に緩和する手段と見なす一方で、結果としては長老社会の支配を強化することにつながると指摘されている。ここには、「日常」＝「長老社会が支配」→「非日常 (ダンス)」＝「長老社会の支配が緩和」→「(新たな) 日常」＝「長老社会の支配が強化された」、という枠組みが見出せる。
9. 筆者は以前、日本の社交ダンスを事例に「日常／非日常」の枠組みについて触れたことがある (井上 2012)。ただし、そこでの主題が「非日常」の領域で人はいかに結びつくのか、という点にあったため、「日常／非日常」の枠組みの相対化には至らなかった。今後の課題である。

参考文献

- Buckland, J. Theresa
2010 'Shifting Perspectives on dance ethnography'. In *The Routledge Dance Studies Reader*, second edition, Alexandra Carter and Janet O'Shea (eds.), chapter 30, pp. 335-343.
- Copeland, Roger and Cohen, Marshall
1983 'What Is Dance?' In *What is Dance?—Readings in Theory and Criticism*, Roger Copeland and Marshall Cohen (eds.), Oxford University Press, pp. 1-9.
- 遠藤保子
1999 「舞踊人類学研究の国際動向」『体育学研究』第 44 巻, pp. 325-333.
2001 『舞踊と社会—アフリカの舞踊を事例として』文理閣.
- 郡司正勝
1991 「伝統と舞踊」『郡司正勝刪定集 第三巻 幻容の道』白水社, pp. 11-88.
- Hanna, Judith. L.
1977 'African Dance and the Warrior Tradition'. *Journal of Asian and African Studies* (12): pp. 111-133.
1996 'dance'. In *Encyclopedia of social and cultural anthropology*, Alan Barnard and Jonathan Spencer (eds.), Routledge: London, pp. 146-149.
- 井上淳生
2012 「カップル空間の共同性 —日本の社交ダンス界における身体接触と競技化」『北海道民族学』第 8 号, pp. 1-15.
- 石福恒雄
1982 「舞踊の人類学 —展望と試論—」『舞踊学』第 5 号, pp. 40-41.
- Kaeppler, Adrienne, L.
1978 'Dancing in Anthropological Perspective'. In *Annual Review of Anthropology*, vol. 7, pp. 31-49.

上林澄雄

1979 「舞踊学の動向—理論体系と科学的客観性との総合 —コード重要文献の紹介と解説」『舞踊学』第2号, pp.29-31.

Karatsu, Rie

2003 'Cultural Absorption of Ballroom Dancing in Japan'. *Journal of Popular Culture (The Popular Culture Association, USA)*, vol. 36, no.3, pp.416-440.

Kaspin, D.

1993 'Chewa visions and revisions of power: transformations of the Nyau dance in central Malawi'. In *Modernity and Its Malcontents*, Jean Comaroff and John Comaroff (eds.), The University of Chicago Press, pp.34-57.

Kealiinohomoku, Joann

1983 'An Anthropologist Looks at Ballet as a Form of Ethnic Dance'. In *What is Dance?—Readings in Theory and Criticism*, Roger Copeland, Marshall Cohen (eds.), Oxford University Press.

2001 'The Study of Dance in Culture: A retrospective for a New Perspective'. In *Dance Ethnography: Where Do We Go From Here?*, *Dance Research Journal*, vol.33(1).

古賀万由里

2012 「異文化を踊る —インド舞踊のグローバリゼーションと日本での受容」『哲学』第128集, pp.369-402.

Kurath, Gertrude. P.

1960 'Panorama of Dance Ethnology'. In *Current Anthropology*, vol.1, No.3, pp.233-254.

Marion, S. Jonathan

2008 *Ballroom: Culture and Costume in Competitive Dance*. Oxford: Berg.

McMains, Juliet

2006 *Glamour Addiction: Inside the American Ballroom Dance Industry*. Wesleyan University Press.

宮尾慈良

1987 『アジア舞踊の人類学：ダンス・フィールド・ノート』パルコ出版.

2003 「舞踊人類学の研究方法論」『スポーツ人類学研究』第5巻, pp.1-18.

2007 『舞踊の民族誌：アジア・ダンスノート』彩流社.

Novack, J. Cynthia

1990 *Sharing the Dance: Contact Improvisation and American Culture*, The University of Wisconsin Press. *New Directions in Anthropological Writing: History, Poetics, Cultural Criticism*. George E. Marcus and James Clifford, General Editors.

野澤豊一

2010 「対面相互行為を通じたトランスダンスの出現 —米国黒人ペンテコステ派教会の事例から」『文化人類学』第75巻3号, pp.417-439.

2012 「踊る、歌う、演奏する身体を映像で記録する —音楽と身体的人类学へ向けて (4)」金沢大学国際文化資源学研究中心メンバーズコラム

http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/other/colum/colum_20120717.html (アクセス日：2012年10月29日)

生地陽

1998 「日本人の踊るフラのゆくえ —異文化の消費の観点からの一考察」『社会人類学年報』24 ; 53-73.

O'shea, Janet

2010 'Roots/routes of dance studies'. In *The Routledge Dance Studies Reader*, second edition, Alexandra Carter and Janet O'shea (eds.), pp.1-17.

太田好信

2010 「文化概念の往還」『[増補版] トランスポジションの思想』世界思想社, 第6章.

Quigley, Colin

1997 'dance'. In *The Dictionary of Anthropology*. Thomas Barfield (ed.), Blackwell, pp.106-107.

Radcliffe-Brown, Alfred. R.

1922 *The Andaman Islanders*. Cambridge University Press.

Reed, Susan. A.

1998 'The politics of and poetics of dance'. In *Annual Review of Anthropology*, vol.27, pp.503-32.

Royce, Anya. P.

1977 *The Anthropology of Dance*. Indiana University Press, Bloomington and London.

Sachs, Curt

1937 *World History of the Dance*. New York: Norton. (クルト・ザックス『世界舞踊史』小倉重夫訳, 音楽之友社, 1972年.)

Savigliano, Marta. E.

1995 *Tango and the Political Economy of Passion (Institutional Structures of Feeling)*. Westview Press.

シェクナー, リチャード

1998 『パフォーマンス研究—演劇と文化人類学の出会いの場所』高橋雄一郎訳 人文書院.

Sklar, Deidre

2001 'Introduction'. In *Dance Ethnography: Where Do We Go From Here?*, *Dance Research Journal*, vol.33(1).

Spencer, Paul

1985a 'Introduction: Interpretations of the dance in anthropology'. In *Society and the Dance*, Spencer, Paul(ed.), Cambridge University Press, pp.1-46.

1985b 'Dance as antithesis in the Samburu discourse'. In *Society and the Dance*, Spencer, Paul (ed.), Cambridge University Press, chapter5, pp.140-164.

Turner, Victor

1969 *The Ritual Process : Structure and Anti-Structure*. New York: Aldine de Gruyter.

Music Division, Library of Congress

2010 'Franziska Boas Collection' Music Division, Library of Congress, Washington, D.C.

<http://lcweb2.loc.gov/service/music/eadxmlmusic/eadpdfmusic/2006/mu006001.pdf>

(アクセス日: 2012年11月1日)

(いのうえ・あつき／北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程)